

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実 施 報 告 書

HT27173 子どもの看護～看護体験を通して子どもへの支援を考えよう！～



開催日：平成27年8月17日(月)

実施機関：公立大学法人 名古屋市立大学

(実施場所) (桜山キャンパス)

実施代表者：山口 孝子

(所属・職名) (名古屋市立大学看護学部・准教授)

受講生：高校生 26名

関連URL:

【実施内容】

【プログラムを留意、工夫した点】

プログラム前半の講義では、「医療における患者様の権利と看護の役割」「プレパレーション」について講義をしました。看護学を学んだことがない高校生にもわかりやすくするため、まず検査・処置を受ける子どもの気持ちを考えたり、参加者の幼少期の医療体験を思い出してもらいながら、子どもが不安・恐怖を軽減でき、検査や処置を乗り越えられるような関わりについて説明をしていきました。そして、看護師の役割やプレパレーションについて理解してもらったあと、現在、臨床の看護師らと共同で取り組んでいるMRI検査を受ける子どもへのプレパレーションとその結果について説明をしました。今回は、まだデータ収集段階なので結果を統計学的に提示することはできませんでしたが、新しいプレパレーションの導入前後で、子どもの不安・恐怖や意欲の程度などを量的に比較できたら、看護の科学的側面をもっと理解してもらえたかと残念に思いました。

午後の見学や看護では、午前中の講義で学んだ「子どもの権利条約」や「プレパレーション」を臨床の中でどのように工夫し取り組んでいるのか、看護師や院内学級の教諭から話を聞いたり、看護用具をみたり、触ったりしながら参加者に具体的に理解してもらうことができたとと思います。

また、2名の看護師から「日々の看護で大切にしていること」というテーマで講話をしてもらい、それぞれの看護師の看護観に触れ、参加者は小児看護に留まらず、看護という専門職に対する理解を深めることができたと思います。

【当日のスケジュール、実施の様子】

- | | |
|-------------|---|
| 9:40～10:00 | 受付 |
| 10:00～10:15 | 開講式(挨拶、オリエンテーション、
科研費の説明) |
| 10:15～10:50 | 講義「医療における患者の権利と
看護の役割」「プレパレーションとは？
～その歴史と内容について～」 |
| 10:50～11:00 | 休憩 |
| 11:00～11:30 | 講義「プレパレーションの実際とその
効果について」 |



11:30~12:30 ランチョンセミナー(ランチをしながら看護師や学生とフリーディスカッション)



12:30~14:30 子どもの療養環境の見学(小児系病棟・外来、院内学級等)と看護体験(プレパレーション、ディストラクション、治癒的な遊び)

※見学と看護体験は4グループに分かれて交代で実施



14:30~15:00 講話「日々の看護で大切にしていること」病棟看護師からのお話

15:00~15:30 クッキータイム、学びの発表とまとめ、質疑応答

15:30~16:00 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)



16:00 終了、解散

【事務局との協力体制】

- ・事務局学術課が、日本学術振興会への申請事務、日本学術振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正等を行いました。また広報 PR、申込受付事務及び当日の運営補助を行いました。
- ・看護学部事務室において、委託費の管理と経費精算事務及び当日の運営補助を行いました。

【広報活動】

- ・事務局学術課において、PR 用ポスター・チラシを作成し、区役所等市民来所施設へ配布・掲出しました。
- ・事務局学術課が、大学広報誌、HP、名古屋市の広報誌「広報なごや」を活用し募集に努めました。
- ・学術課職員が近隣の高校を訪問し、本事業について PR しました。
- ・事務局学術課が、名古屋市教育委員会へ事業趣旨を説明し、市立高校校長会の承諾を得て、市立高校へポスター・チラシの配布・掲出をお願いしました。

【安全配慮】

- ・参加者及び従事者には、傷害保険へ加入させ、万一のトラブルに対応しました。（該当事故は起こりませんでした。）
- ・参加の際に、その保護者の同意（送迎は保護者が責任を持つ）が確約されたことを条件としました。
- ・施設見学に際しては、参加者にマスクの着用、手洗い・うがいを促し、感染予防に努めました。また、感染及び感染の疑いのある患者との濃厚接触は避けました。

【今後の発展性、課題】

現在、研究データを収集している段階であるため、今回のプログラムでは、新しく開発したプレパレーションによってどのような効果があったのかを、事例として紹介しました。今後は、研究結果について、統計的手法を用いて分析し、参加者に提示することで、看護における科学的側面をもっと学んで頂けるようにしたいです。

また、今回、定員の 3 倍以上の応募者がいたため、高校生の看護への関心は非常に高いと感じました。したがって、できるだけ多くの方に“看護”について知って頂く機会を設けられるように検討したいと考えます。

〔実施分担者〕

山口 大輔 看護学部・助教

【実施協力者】 _____ 11 名

【事務担当者】

鈴木 渉太 事務局 学術課 社会貢献係